



# 君津商工会議所 FAX通信

会員の皆様へ…会頭からのメッセージ  
平成28年3月10日(木)

Vol. 3 2 3

青年部創立20周年記念によせて  
(記念祝辞から)

## 秋元 秀夫

青年部の皆様、創立20周年心から20年間の御苦勞をねぎらい、おめでとうとお祝い申し上げます。

創立された平成7年頃はバブル景気が大きくはじけて、円高、デフレ、不況と言う今まで経験した事の無い極めて困難な時代でありました。初代高橋和彦会長以来、野村友行現会長に至るまで多士済々の歴代会長に恵まれ、代々それぞれの個性、経験を活かされて県内では事業内容、会員数共に最も充実した青年部と評価される成長を遂げて下さった事に厚く感謝と敬意を表し誇りに思っております。特にここ数年は、数々のアイディアに積極的に挑戦して下さいました。不況、不透明な時代には決意、実行への道は中々難しいものであります。中でも「きみコン」等は多くの市民から喜ばれ、今後が大いに期待されております。

先日東大出身の若いエコノミスト飯田康之先生とお会いしました折、先生が言われた事は「アイディアはインターネットからは生まれて来ません。若い男女、女性を交えた古参社員、町や村の古老達が集まるにぎやかな会話の中からアイディアは生まれるものです。日本人はこうしたアイディアを具現化する能力、技術力が非常に高い民族であります。アイディアを実現させるコツは下手な鉄砲も数撃ちや当るであります。あきらめずはダメです。もう一回、もう一回とあきらめず続けることです。下

手な鉄砲撃ちも一人ではダメです。多くの仲間が必要です。ノーベル賞受賞学者たちの事例も良き仲間、良きチームがあきらめず信念を持って続けられたから成功したのであります」…と。

これからいよいよ少子高齢、格差社会へと突入します。しかし悲観論、他力本願では解決できません。マスコミが華麗なる変身を遂げたと言われる木更津の鈴木会頭が日商の月刊誌「石垣」に「木更津は50年かけて郊外開発が進み、街中は空洞化してしまった。これからは50年かかっても良いから元の町に戻りたい」と書かれております。鈴木会頭が戻りたい凡そ50年前の木更津の人口7万3千人、君津7万人でありました。

多くの人達は人口が多くなれば繁栄すると言われます、今木更津は凡そ13万人、君津は凡そ9万人弱となって各地域の中心商店街は空洞化し、シャッターを降ろしております。君津市の将来目標人口は9万人を掲げております。人にも町にも適正許容力があると思います。私は君津のこれまでの歴史的、地政学的な経過や財政規模、サービス水準を考えた時、将来の君津市人口は7万～8万人位かと思っております。

温故知新、歴史に教えられることは「窮すれば通ず」であります。終戦後の日本の人口は7500万人でありました。不足、不便、貧乏だったから私達の先輩達は新しい技術を今までとは違う方法を考え、一次産業から見事に脱皮してきたのであります。人の幸せは、決してお金だけでは得られません。

会議所は良き仲間、先輩が多くおられます。良き友を多く持つことが会社を育て、人を育てるコツであります。地図を開いて見て下さい。圏央道が貫通すれば千葉県の副都心となりうる位置にあります。次の世代を託する青年部の皆様の郷土愛に燃え、何時までも若々しく健康で決断力あるご活躍をご期待申し上げます、御祝の御挨拶とさせていただきます。